

# こう入道殿御返事

文永一二年四月一二日 五四歳

人の御心は定めなきものなれば、うつる心さだめなし。さどの国に候ひし時、御信用ありしだにも不思議にをばへ候ひしに、これまで入道殿をつかわされし御心ざし、又国もへだたり年月もかさなり候へば、たゆむ御心もやとうたがい候に、いよいよいろをあらわし、こうをつませ給ふ事、但一生二生の事にはあらざるか。此の法華経は信じがたければ、仏、人の子となり、父母となり、めとなりなどしてこそ信ぜさせ給ふなれ。しかるに御子もをはず、但をやばかりなり。其中衆生悉是吾子の経文のごとくならば、教主釈尊は入道殿・尼御前の慈父ぞかし。日蓮は又御子にてあるべかりけるが、しばらく日本国の人をたすけんとなかつくに中国に候か。宿善たうとく候。又蒙古国の日本にみだれ入る時はこれへ御わたりあるべし。又子息なき人なれば御としのすへには、これへとをばしめすべし。いづくも定めなし。仏になる事こそつゐのすみかにては候へとをもひ切らせ給ふべし。恐々謹言。

卯月十二日

日蓮花押

国府  
この入道殿御返事

あまのりのかみぶくろ二、わかめ十でう、こものかみぶくろ一、たこひとかしら。